

ボラみ隊とは…
『ボラみ』に掲載された団体に足を運んでボランティア活動を体験したり、ボランティア活動をしている人たちと交流する、「ボランティアしてみたい」「見てみたい」という人たちの集まりです。

笑顔いっぱいの手作りスポーツフェスティバル

今回、名古屋在住のフィリピン人の子どもたちが通う「国際子ども学校」のスポーツフェスティバルにボランティアスタッフとして参加しました。

赤組と白組に分かれて、点数を競う今回のスポーツフェスティバル。私は赤組のお手伝いをする事になり、無邪気に走り回る子どもたちを整列させたり、玉入れの籠を持つ係などをしました。元気すぎる子どもたちに振り回されはしましたが、いざ競技になると真剣に取り組む子どもたちの姿からは、とても元気をもらいました。

椅子のりゲーム、玉入れ、障害物リレーなどを終え、残すは最後の綱引きです。この時点で同点。綱引きの結果で勝敗が決まるという大事な一戦でした。練習の時は赤組が強かったらしく、自信満々の子どもたち。その自信が裏目に出たのか、赤組はなかなか本領を発揮できず、あえなく負けてしまいました。泣きそうになる子どもたちを見かねて、保護者も参加して再戦することになりました。再戦後も決着がつかず、5回くらい綱引きをやり直すことになりました。最終的に結果は変わらず、すねたり、倒れこんだりして悔しがる赤組の子どもたちを見ると、このスポーツフェスティバルにかけける思いの熱さが伝わってきました。そんな純粋な子どもたちと過ごした1日、本当に笑わせてもらいました。

当日参加していたボランティアの皆さんにも感想をうかがいましたので、ご紹介します。

国際子ども学校...1998年に開校した在日フィリピン人の子どもたちのための学校。現在は4歳~15歳までの子どもたち15名が在籍している。



愛知淑徳大学・Yさん

今回初めて「国際子ども学校」のスポーツフェスティバルに参加しました。始まる前から、子どもたちの明るくてハツラツとしたパワーに圧倒されました。

私は将来、教育に関わる職を目指しており、様々なボランティアに参加していますが、今回は私にとって新たな発見だらけのボランティアとなりました。まずは言葉の壁です。日本語を理解してくれるのか不安もありましたが、子どもたちのほうから積極的に話しかけてくれて、とてもうれしくなりました。そして、一生懸命子どもたちを応援する保護者の皆さんを見て、私も小さい頃を思い出しました。

国際化に伴って、学校教育の環境もどんどん変わっていくと思います。私も、子どもたちの未来のために少しでも力になりたいと思いました。

愛知淑徳大学・Kさん

何かボランティアをしたいと思っていましたが、なかなか行動に移せずにいました。しかし今回、友人からの誘いがあり参加しました。子どもたちと触れ合い、とても充実した楽しい時間でした。お昼ごはんの時は、保護者の方からフィリピン料理のお裾分けをいただき、心が温かくなりました。

また、「国際子ども学校」ができた経緯などもうかがい、子どもたちの現状を知りました。フィリピン人ですが、日本で生まれ育った子どもたちが、日本人の子どもたちと同じようにいかないことがあるということを知りました。子どもたちの笑顔を見て、やるせない気持ちになりました。今回のボランティアを通して、様々な悩みを抱えながらも笑顔で暮らしている外国人の存在を知り、日本がもっと国際色豊かになるといいなと感じました。

団体紹介

国際子ども学校を支援する会
〒466-0804 名古屋市昭和区宮東町260
名古屋学生青年センター気付
TEL:(052)781-0165



体験文

ボラみ隊
山城 敬一
会社員です。仕事の休みや定時後にボランティアをしています。

名城大学・ボランティア協議会
縄手保則

縄手さんより

まさかボランティアを通して、これほど大切な仲間ができ、自分の成長を実感できると思っていませんでした。ボランティアに参加することによって、皆さんも新たな発見があるかも知れません。

ある日の縄手さんの1日

9:00 集合
10:00~ 障がい者の方と一緒に祭を回る
12:00~ お昼ごはん
12:30~ 祭でお店の手伝い
15:00~ 片付け
16:00~ 解散

ボランティアを通して
誰かの役に立てる喜びを感じよう

私がボランティアに関心を持ち始めたのは、高校を卒業し、しばらく経った頃です。当時、それまでの自分を振り返り、充実したクラブ活動や学校生活、そして趣味まで、周りの方々の支え無しでは実現できなかったらうと感じていました。それを機に、「今度は自分が誰かの役に立ちたい」と考えるようになり、ボランティアに興味を持つようになりました。

そして、まずは飢餓の問題について調べてみると、子どもに食べ物を与え、自分は栄養不足で亡くなっていく母親、唯一頼れる存在であった母親を亡くし衰弱していく子どもたち、感染症に苦しむ人たちがいることを知りました。さらに、このような苦しい状況にいる人が少数ではなく、数億人いるということも知りました。写真や映像を目の当たりにしたときは、心の底から悲しい気持ちになりました。これがきっかけで、「誰かの役に立ちたい」という漠然とした気持ちが、「ボランティアに参加してみよう」という気持ちに変わりました。

そして、大学生となり、名城大学のボランティア協議会に参加しました。ボランティア協議会は9つの部門で構成されており、

私は環境ボランティア部門と地域安全パトロール部門に参加しています。環境ボランティア部門では、定期的に大学周辺のゴミ拾い活動をしています。また、ペットボトルのキャップを集め、それをワクチンに変えるという活動もしています。地域安全パトロール部門では、地域の方々の安全や治安を維持することを目的に、見回り活動などを行っています。他にも、障害者支援施設「あしたの丘」で開催された祭のボランティアや、東日本大震災の被災地のひとつである宮城県大島でのボランティアにも参加しました。

あるとき、見回り活動をしていると、初対面の男性に「本当に助かるわ」と声をかけていただきました。「ありがとう」と言われたことはありませんでした。「誰かの役に立てたのだ」ということを実感でき、とてもうれしくなりました。もしかすると、その男性は、もう私のことは忘れてしまっているかもしれません。しかし、私にとってはとても誇らしく、「ひとりでも多くの方の助けになれるように、これからもボランティアをがんばろう」と思った出来事でした。

この先は、海外に行き、今起きている問題を実際に自分の目で確かめ、何が必要とされているのか、自分にできることは何かということを考えたいと思っています。そこで学んだ海外でのボランティアに対する考えと、これまで経験してきた日本でのボランティアに対する考えの共通点や相違点を参考にし、将来の活動に活かしていきたいと考えています。



地域の見回り活動